

初期フッサールにおける事態論 (要旨)

富山 豊

2008年10月3日

『論理学研究』前後の時期にフッサールが企てた存在論において、対象のカテゴリーは豊穡なものであった。そこには数学的对象のようなイデア的对象が含まれ、普遍者とは別に抽象的個別者が認められ、分節構造をもつ対象としての事態にまでも権利が与えられる。

しかしながら、豊穡な存在論には批判に晒される隙もまた多い。こうした多様な対象の存在にコミットするフッサールの志向性分析に対しては、Ernst Tugendhat の古典的批判をはじめとする多くの否定的評価がつきまとっている。その批判の根にあるのは、問題のないケースからの安直な類推と体系癖から過度な一般化によって神秘的虚構物を捏造したという否定的フッサール像である。

こうした批判に対して、フッサールの志向性分析とそれが描き出す存在論を、できる限り擁護することが本発表の狙いである。フッサールの分析は、極めて一貫した原則に従って統一的に進められている。それは Tugendhat が自身のフッサール批判の中で適切に指摘していたように、判断ないし述定の文脈における振る舞いという観点からの志向性理論である。本発表では、『論理学研究』およびその前後の論理的講義群などを参照しつつ、こうした志向性理論の基本構造をまず確認したい。

それに続いて、志向的相関構造の分析において文ないし命題の相関者として導入される事態概念を検討したい。この事態概念は、多くの論者が非難するような不明瞭な理由によって導入されるものではなく、明確な基準によってその分析を評価、検討しうるようなものである。このことを、志向性理論の一般構造との統一的連関の中で論じてみたい。そこにおける様々な諸要素との関わりにおいてのみ、不整合ともとれる動揺を見せるフッサールの事態論を導いていた動因を明らかにすることができる。フッサールの存在論的主張に関する内在的研究は、まだ始まったばかりなのである。